

望天 観気

農地の価値

私たち日本人にとって田や畑などの農地は「心のふるさと」ではないでしょうか。全国の農地面積の約四割、総農家数の約四割を占める中山間地域は日本農業の中で重要な位置を占めています。

しかし残念ながら、中山間地域の農地の荒廃は近年日本中で加度的に進んでおり、地域の農家が協力して農地を守り、新規就農者を受け入れても、耕作放棄地の増加するスピードに追い付かないのが現状です。まさに日本の食糧、国土保全、そして伝統文化の危機です。心のふるさとである農地を守るためには、持続可能な農業経営体を増やすことが喫緊の課題であり、その地域に合った農業を実践できる仕組みが必要です。

兵庫県北部に位置する中山間地域の養父市でも、過疎化や高齢化に伴って農業の担い手が不足し、耕作放棄地が増え、農業経営は危機的状況にあります。その上に養父市の地形は急峻で農地が狭いため生産コストが総じて高くなってしまい、ただ農産物を生産しているだけでは価格競争で大規模生産地に太刀打ちできません。そこで企業が持つ経営のノウハウを活用し六次産業化による持続的な農業を可能にすることが必要と考え、国家戦略特別区の認定を活用して大規模生産地にも打ち勝てる仕組みをつくりました。

農地の流動化を促進し、かつ迅速に処理するため農地の権利移動に係る許可権限を農業委員会から市長に移管し、次に農地所有適格法人の役員要件を緩和し企業の農業参入のハードルを下げ事業者を確保しました。さらに企業と地域住民とが一体となり農業に取り組める環境づくりとして、これまで認められなかった農地所有適格法人以外の法人による農地取得を可能にしました。これは戦後日本を支えてきた農業システムの大革命です。現在二三事業者が養父市で農業参入し、約二八分の農地で営農しています。関係者の協力をいただきながら、養父市の農地に新たな価値を生み出す機能を創出し、農地、雇用、伝統文化を守っていくため強い意志を持って地方創生の実現に向けて挑戦していきます。人口の東京一極集中が進み、地方は疲弊し生産性を失いつつある中山間地域の農地を既存の規制にしがみついて失ってはなりません。



養父市長
広瀬 栄

ひろせ さかえ
1947年兵庫県生まれ。71年鳥取大学卒業後、民間企業での勤務を経て、76年八鹿町役場に入る。2008年養父市長に就任後、地域の改革をけん引。国家戦略特別区域にもいち早く手を挙げ、14年に指定を受ける。中山間地農業の未来を描く養父市の挑戦の旗振り役として活動する。

ケーキが焼けるなら、と
義父にすすめられ
山のパン屋さんが生んだ
パンを食べていただき、
喜んでもらえれば最高です

農と食
の邂逅

伊藤 恵美 さん

島根県出雲市

カウベルミルクガーデン牧場株式会社 取締役
牧場のパン屋さんカウベル 店長

中山間地のパン屋は、粉は小麦でなく米粉を使い、具材に自家牛乳をたっぷり使用して、牧場との関わりも伝える。米粉は地元稲作営農組合を活用して地域農業の六次産業化を形成する。地域が支えている強い農業がある。





P19: 知人の紹介で知り合った恵美さんと学さん。息がピッタリの夫婦だ P20: カウベルでの一番人気の商品である食パンに牛の焼き印を押す。パンに膨らみを持たせるため、米粉80%にグルテン20%を混ぜる(右上) メルヘンの世界に迷い込んだようにきれいに手入れされた敷地内(右下右) 店内には喫茶コーナーも(右下左) 平日は20~30種類、休日は40~50種類のパンを焼く(左)

結婚と同時にパン職人に

出雲市内から車で約三〇分。山間の道を進んでいくと佐田町にある「牧場のパン屋さんカウベル」に着く。夏には蛍が飛び交う小川が近くを流れる自然豊かな場所だ。民家は決して多くない。失礼ながら「ここでパン屋が成り立つかな」と思った。だが、平日でも途切れることのないお客さんたちを見ると杞憂と分かった。平日で三〇〇〜四〇〇人、休日には一〇〇〜二〇〇人が訪れるという。パンを買うだけでなく、きれいに植栽された店舗周辺を散歩し、さらに約六〇メートル離れた牧場に足を向ける人もいる。

カウベルを開店してすでに二年目。この年月の長さこそがお客さんに愛されてきた証拠。開店以来、ずっとパンを焼き、店を切り盛りしているのが伊藤恵美さん(三六歳)だ。カウベルは、約二五〇頭の乳牛を育てるカウベルミルクガーデン牧場株式会社(二〇〇六年に開いた。代表取締役社長で義父の伊藤篤男さん(六七歳)を「地域を盛り上げたい」という想いがものすごく強い人」と恵美さんは語る。

篤男さんはカウベル開店前から仲間と一緒に野外コンサートを開いたり、タマネギを共同で生産し、産直市に出すなどまちおこしに力を入れてきた。同じ酪農家仲間「加工をしよう」と持ちかけたこともあった。だが「こんな田舎で商売は難しい」と話は前に進まなかった。

転機は、篤男さんの長男で後継者の学さん(三九歳)と恵美さんが結婚を決めた時。恵美さんはケーキ職人として松江市内のケーキ店で腕を磨いていた。「ケーキが焼けるならパンも焼ける」と義父は思ったのかも(笑)「パンならば生地や具材に牛乳を使え、牧場との関わりを伝えられる。粉は小麦ではなく米粉を使うことにした。『当時は空前の米粉ブーム。近くの営農組合が作った米を使って、地域に根差した商品にしました』と学さんは話す。生乳は農協経由で出荷しているが、佐田町内の七軒の酪農家の牛乳だけをタンクに詰め、生協などに供給してきたこともあり、その牛乳の一部をパンにも使うことにした。

新婚生活の余韻に浸る間もなく、恵美さんはパン屋で一年間修業し技術を習得。さらに、その間も学さんとともに、アグリ起業家セミナーで経営を学び、米粉パンの専門家に個人指導を仰いだ。

篤男さんの積年の夢を託される形となった恵美さんだが、「私自身、ものづくりが好き。作ったものを食べてくれる人がいて、喜んでくれれば最高」と屈託なく思っていた。そうするうちに、周囲の自然とうまく調和する木調の建物が出来上がった。最初は「もってこぢまんまりした建物だと思っていた」恵美さんだが、話し合っうちに喫茶コーナーもある立派な建物になったという。

パンは生き物。いい顔をしてる

開店すると、驚くほど多くのお客さんが訪



れた。二人の従業員を雇い、早朝から生地を作り、必死に焼いても売り場からすぐになくなる。「佐田町では唯一のパン屋でした。米粉パンの珍しさもあってお客さんが来てくれたのでしょうか。」

牧場管理がメインの学さんは午前五時起床。恵美さんはそれより早い三時起床。生地を仕込み、パンを焼き、さらに翌日の仕込みのためと夕方まで工房に入りっぱなし。夜は小学校に通う二人の息子の面倒も見るという忙しい日々だ。

それでもパンの話になると恵美さんの目は一段と輝きを増す。「パンは生き物。いい顔をしてくれるんですよ」

その日の気温や湿度により、生地の膨らみかたもパンの焼き上がりも変わる。年ごとの米の出来具合でパンの味わりも変わるとか。これこそ小麦と違う米粉パンの面白さだという。毎日パンと向き合いながら恵美さんは「今日はこんな表情をしてくれるんだね」と語りかけるのだろう。

その真心はお客さんに届いている。カウベルのリピーターが口をそろえて言うのは「米のうま味がある」「風味がある」という言葉。その味を出すために恵美さんがこだわるのは粉の配合だ。あえて二カ所の製粉所に委託する。異なる米粉を組み合わせることで風味やうま味がいつそう増すという。

カウベルには篤男さんと義母の幸枝さん（六七歳）が手入れしている庭や牧場へと続く散歩道など自然豊かなロケーションを楽しみに来る人も多い。また、牧場は酪農教育ファームとして認証を受けており、年間一〇〇人以上を受け入れている。さらに、土日にピザ作り体験やバター作り体験といったプログラムを提供しており、これらに参加した人たちがカウベルに寄ってくれる。バター作り体験に参加すると、カウベルの工房で焼き上がったばかりの食パンに、作りたてのバターを乗せて食べられるとか。

この食パンこそ、カウベルの看板商品だ。生地は水を使わず牛乳でこねる。ほのかなミルクの香りが食欲を誘う。「牛乳は米との相性が良くて、やわらかく仕上がります」と恵美さんはほほ笑む。毎日焼くパンは多くを店舗で売りますが、市内の商店や保育所でも喜ばれている。

実は、カウベル開店の年に恵美さんは長男を出産した。当時、熟睡できる日は少なかつたはず。それでも「おばあちゃん（義祖母の孝子さん）が面倒を見てくれました。家族の協力があつたからできたこと」とあくまでも謙

虚で頭が下がる。

夢は息子たちとの牧場経営

町内に複数のパン屋が誕生し、競合する場面も出てきた。「今まで以上に経営を意識していかなければと思っています」と恵美さんは口元を引き締める。

恵美さんと学さんは今、パンに続く第二の柱となるアイスクリームの加工・販売を構想中だ。米粉パンは日持ちがしない上に、小麦パン以上に硬くなりやすい。「賞味期限が長く、遠方に発送できるという点でもアイスクリームがいい」と学さん。素敵なロケーションを活かし、お客さんを近くに感じられる農業、面白みのある酪農経営を続けていくつもりだという。その先の夢は、二人の息子と牧場経営をすること。幸い、長男の汰一君（二一歳）は「牧場をやる」と、次男の咲翔君（六歳）は「パン屋さんになる」と頼もしい限りだ。

七軒ある地元の酪農家のうち、後継者がいるのはカウベルミルクガーデン牧場ともう一軒のみ。中山間地の厳しい現実とは若い二人の肩にのしかかっている。それでも恵美さんは「飽きることがない」というパン作りを続け、学さんは牛の管理をしながら可能な限り体験者を受け入れていくという。

「牧場体験に参加した子どもの中に、一人でも二人でも『牛を飼いたい』という子が出てくればいいなあ。そんな学さんを『そうぞう』と見つける恵美さんがいた。

（青山浩子／文 河野千年／撮影）



「料理は食べるのが専門よ。作るのは好きではないわ」と笑う母に、私は初めて聞いたかのように相づちを打ちます。

母は六八歳でアルツハイマー型認知症と診断されてから五年がたち、昨年一二月に老人ホームに入居しました。

実家を片付け始めたなら、新聞紙で丁寧に包まれた大きなガラス瓶、ほうろろの丸型ポット、漬物石が出てきたのです。横浜の3DKの団地で梅干し、らっきょう漬け、新しゅうがの甘酢漬けなどを作っていた母の姿がよみがえりました。

春はフキの含め煮、秋は栗ごはん、雪が降れば決まっておしるこ、正月はおせち料理と、母の料理には四季の彩りがありました。

夏休みの昼ごはんはそうめん。母は額に汗を噴き出させながら、ナスを焼いて皮をむき、そうめんは指に巻きつけ丸くしてから、ざるにきれいに並べてくれました。麵つゆも自家製です。

電気オーブンでロールパンを焼いたり、焼き豚やミートローフ、クリスマスのローストチキンも作ってくれました。

中でもミートローフは母の定番の作り置き料理で、妹と私の大好物でした。ミートローフを焼いている時の部屋中いっぱいになる匂いも、しっとりとした食感も忘れられません。

七〇〇八〇年代は公害が問題になっていて、母は消費者運動に熱心に取り組んでいました。

私がアトピー性皮膚炎だったこともあり、食べ物やせっけんには気を使っていました。「子どものためにいいものを」という強い想いが、母のエネルギーの源泉になっていたはずですよ。

今、母が健康ならこう言うでしょう。

「料理が好きだなんて、悠長なことを考えている余裕はなかったわよ。お父さんの給料をやりくりして、必死に子育てをしてきたんだもの」と。先日、妹が「お母さんのミートローフを再現して、娘に食べさせてあげたい」と言いました。母が忘れてしまっても、その味は私たちの記憶に、食卓の情景と共に鮮やかに刻まれています。

私も母の味を思い出せるうちに、いろいろ作ってみなくっちゃ。

実家で見つけた漬物容器は、来月、わが家に運び入れます。



フードライター
大久保 朱夏

おおくぼ しゆか
1972年神奈川県生まれ。料理書の編集、食と健康に関わる記事の執筆や、農家とコラボレーションした野菜レシピの提案も手掛ける。主な著書に『はじめてのライスマイルク』(2015年、自由国民社)、『首都圏トレイルランニングコースガイド』(2012年、マイナビ)など。沖縄の国頭トレイルランニング大会アンバサダーを務める。公式ブログ：たべる、つくる、はしる<http://shukas.exblog.jp/>

母のミートローフ

フォンテラジャパン株式会社
代表取締役社長

斎藤 康博

(六三歳)



●さいとう やすひろ
一九五四年長野県生まれ。七十七年上智大学
外国語学部英語学科卒業。同年三菱商事
株式会社に入社し、八九年英国三菱商事
(ロンドン) 食料部マネージャー、九四年帰
国し本店糖質部(二〇〇一年原糖部長) (ユ
ニットマネージャー)、〇五年フォンテラ
ジャパン株式会社営業本部長、〇八年
フォンテラブランド株式会社営業本部長
を兼任、一二年より現職並びにRegional
Director, North Asia, Fonterra Co-
operative Limitedを兼務。

フ

オンテラジャパンは、二〇一四年から北海道で「ニュージールランド・北海道酪農協力プロジェクト」を続けている。このプロジェクトはニュージールランド(以下、NZ)型の「放牧酪農」を北海道で応用することで、飼料コストの削減、労働時間の短縮、乳牛の疾病率低下などを実現できるかどうか検証するための研究をしている。また五戸の農家での実験的調査の途中だが、すでに一部の農家では、年間の飼料代が約四割も削減できた一方で、乳量が増えたため年間の利益が四〇〇万円も増えた例も出てきており、NZ型放牧酪農の持つ将来性に大きな期待が寄せられている。

当初は北海道でNZ型の放牧を適用すること自体が到底不可能だろうとの指摘を多く受けた。確かに春のNZと厳冬の北海道では気候に大きな差があり、NZ型放牧酪農をそのまま取り入れることは現実的ではないとみられたが、私は牧草の利用が可能な春から初秋にかけては最大限に自然の恵み(牧草)を活かし、冬季は刈り入れたサイレージ(干し草)を牛に与え

るなど工夫を凝らすことが十分合理的だと思う。何より春から秋までの農業従事者の労働時間の短縮は、酪農の持つ重労働のイメージを大きく変える効果を持つているとみている。

日本の酪農は他の農業と同様、「後継者の育成難」という非常に厄介な問題に直面しており、北海道でも毎年約二〇〇戸前後の酪農家が離農しているのに対し、新規就農者は二〇戸前後しかない。その大きな原因の一つが圧倒的な労働時間の長さである。一四年の調査では、自営酪農者の平均労働時間は、男性で年間五四九四時間という過酷な数字で、稲作の三倍、畑作の二倍である。この現実をそのままにしておいて、若い後継者を呼び込むのは極めて難しい。

乳牛が牧場でのんびり牧草を食んでいる、というのが一般的な酪農のイメージだが、日本の酪農現場はほぼ全ての乳牛が牛舎に一生つながれ、輸入穀物から作られた濃厚飼料を与えられて搾乳されている。なぜなら日本の気候に合致し、牛乳生産を高めるのに有効

だったからである。

た

だし、大前提として、「農業従事者が足りていない限りは」ということがある。その最も重要な前提が崩れかけている現在、このような労働集約型の旧方式を日本中で続けてよいのか？ というのが私たちのプロジェクトの出発点であった。

一方、このような農家数の減少に対する対照的な対策として、国、地方を挙げて大々的に進められているのが大規模農家、いわゆる「メガファーム」の育成である。搾乳ロボットなどの最新テクノロジーを武器にした圧倒的な効率性を活かし、高度の生産性を実現することで農家数の減少をも解決する、素晴らしい政策である。

しかし、問題はこのメガファームにもリスクファクターが明らかに存在する。一つには、規模拡大により輸入穀物飼料への依存度が極大化することである。国産の牛乳を守ると言いながら、その存立基盤が「輸入穀物に頼らざるを得ない」という大きな矛盾に直面することになる。それは、国際穀物価格の暴騰による飼料コストの急上昇のリスクに、常にさらされることをも意味する。もう一つは、ふんだんな補助金を使った大型設備投資による負債の増大である。規模が小さいうち

は、個別の負債があっても農家個人の問題に終わっていたが、メガファームになると負債の規模も桁違いになる。もし、飼料穀物の価格暴騰が起きて、経営に問題が発生した場合、当該の地方経済にも大きな影響が出かねない。インパクトの大きさが格段に違うのである。

その点に比べN/Z型放牧酪農の持つ強みは、前述の営農上のリスクを抑えられる点にある。コスト低減を長期間継続して実現できることは、農家にとって大きな安心につながるし、負債が圧縮できることは離農の抑制にもなり得る。さらに、自然を活かす「持続可能性」、環境を守る意味での「社会的責任」、乳牛を育てる上での「動物福祉」など、多面的な強みがある。そして最終的には、やはりコスト面での優位性と自然由来の「グラスフェッド(牧草肥育)」の乳製品を生み出す点に集約される。日本においてこの方式を広めるには、土地の確保の困難さや放牧酪農指導者の少なさなど、さまざまなハードルが存在しているのは事実である。

しかし、酪農の魅力を若い後継者たちに伝え、就農の際の選択肢を増やすことを目指して、このプロジェクトを今後も継続していきたい。自治体、農業団体とも協力し推進することが重要なポイントである。

F

リスクを抑えた放牧酪農方式の強みを活かす 労働集約型旧方式を続けてよいのか？

高性能作業機への期待

国立研究開発法人農業・食品産業技術総合研究機構 中央農業研究センター
北陸研究拠点 北陸農業研究監

大下 泰生

ほ 場に直接種をまく水稲の直播栽培は、水田に育てた苗を植える移植栽培に比べて省力化や低コスト化に有効であり、普及面積が年々増加しています。

直播には「湛水直播」や「乾田直播」などがありますが、水稲と麦類や大豆などの畑作物を組み合わせた水田輪作においては、田畑輪換に適した水稲の乾田直播が取り組まれています。乾田直播は代かきをせずに畑状態で播種し、苗立ち後に入水する方式です。冬季にほ場が乾燥する温暖地では、作業に余裕のあるこの時期に耕起や碎土、均平などのほ場の準備が可能であり、播種適期に早期に播種することができま。これにより、代かきや育苗、田植えなど、春季の作業競合を避けられることから、規模拡大にも容易に対応できます。

ここで用いる乾田直播用播種機にはいくつかの方式があります。不耕起播種機は作溝ディスクでは場に細い溝を切り、肥料と種子を条播して覆土する方式で、一般に用いられるロータリシダのようにほ場全面を耕起して播種する方式に比べて所要動力が小さく、高速での作業が可能です。また、降雨などにより作業が中断しても、ほ場表面が乾燥すればすぐに作業できるなどの利点があります。



播種適期に不耕起播種機で高能率作業 (写真は試作機)

代かきを行わない乾田直播では、漏水による基肥の損失や、除草剤の効果低減といった課題があり、漏水を抑えるために重いローラを用いた鎮圧作業が必要になります。さらに、不耕起播種機を用いる体系では、トラクターのタイヤ跡によりほ場の均平性を損ねないよう、ほ場が膨軟な場合は播種前に鎮圧を行い、播種後も覆土を確実にするために必ず鎮圧を行います。

不 耕起播種機を用いて水稲・麦類・大豆の輪

作を行う約八〇分の大規模水田営農で、乾田直播での労働時間や生産コストの削減効果を実証したところ、一〇〇当たりの労働時間は、地域の平均的な移植栽培に比べて約三分の一に短縮されました。また、業務用多収品種を用いた実証栽培では一〇〇当たり約六六〇キログラムの収量となり、六〇キログラム当たりの全算入生産費が地域の平均的な移植栽培に比べて約二分の一まで削減されました。

大規模化が進む水田営農においては、収益性の確保や労働の集中を回避するため、水稲と麦類や大豆、野菜などを組み合わせ、特定の作物に依存しない多様性と年間を通した労働の分散が必要と考えられます。大区画化や汎用化のための基盤整備が進む中、省力化や汎用利用ができる高性能作業機が期待されます。

F



Profile

おおした やすお
1958年山口県生まれ。81年鳥取大学農学部卒業後、農林水産省農事試験場入省。東北農業試験場、北海道農業研究センターなどを経て、2010年より農研機構中央農業研究センターに勤務。17年4月より現職。専門は農業機械。



地域へ移住者促進で棚田保全 農村の婚活で若者にアピール

兵庫県神崎郡市川町
NPO法人 棚田LOVERS 永菅 裕一

農村deふれ愛ませんか？

「棚田LOVERS」という名前の通り、私たちは棚田を愛してやまず「美しい棚田を将来につなげたい」という想いのもと、一〇年前より、兵庫県神崎郡市川町上牛尾地域を中心とし、生き物・食・農の大切さを、実践を通じて伝えるなどにより棚田の保全を目的とした活動を行っています。

その内容は、農作業体験の受け入れや貸し農園の運営、収穫祭など祭りの開催、棚田米のブランド化、姫路市など都市に向き棚田米の試食と販売などを行うなど、多岐にわたっています。今回は、移住者促進の活動を中心にお話しします。二〇一五年から地域自治会と連携し、結婚適齢期の人を呼び込もうと婚活イベントを開催しています。

婚活とは、結婚相手を見つけようと積極的に活動することです。婚活イベントといえは「すてきなレストラン」でのパーティーなどを思い浮かべ

る方が多いのではないのでしょうか。

どっこい、私たちの開催する婚活イベント「農村deふれ愛ませんか？」の会場は、「棚田や農村・旧小学校」です。開催は年に三回、棚田や農村の美しさをより感じてもらえるように四月、九月、一月を選んでいきます。

棚田をフィールドにして、食材として捕獲されたシカなど野生の鳥獣を材料としたジビエ料理、地域でとれた野菜などを使ったピザ釜でのピザづくりや草木染め体験などいずれも地域の良さを参加者に体験してもらえようないイベントを企画しています。

参加を機に地域のファンに

地元の人たちはもともと人懐こい気質からか、参加者がワイワイやっていると食材としてとれたてのキャベツなど野菜を持って来てくれたり、ジビエ肉に戸惑う参加者に話しかけるなどフォローをしてくれることが多々あります。参加者の



多くは都会に住むものの自然が好きだったり田舎暮らしに憧れている人が多いので、地元住民から里山の話聞くのがとても楽しいようです。「棚田はいつ頃できたんですか？」「イノシシはどうやって捕獲したんですか？」など質問して地元住民とも話が盛り上がっています。

「農村deふれ愛ませんか？」の結果ですが、二〇一五年四月には、大阪や神戸などから男性二〇人、女性一六人の参加があり、六カップルが誕生しました。うれしいことに、そのうち一組が婚約をしています。一六年の男性一八人、女性八人が参加した会では三カップル(地元男性と地元外の女性二組、地元外の移住希望者男性と地元外の女性一組)が誕生しました。

このように、毎回、複数のカップルが誕生し、イベントは盛況です。まだ、結婚をしてから地域に移住してくれたというカップルは今のところ出ていませんが「楽しかった」「ジビエがおいしかった」「自然の中で過ごせてよかった」などと言って

profile

永菅 裕一 ながすが ゆういち

NPO法人棚田LOVER's

1984年生まれ。兵庫県神崎郡市川町出身。高校時代、環境問題に関心を持ち、兵庫県立大学大学院で、環境教育や棚田を学ぶ。その中で棚田と出会い、棚田が失われていることを知る。生物・食・農の大切さを伝え、棚田を未来の子どもたちにつなげようと、米育てや自然体験系の企画を年60回程度行う。「JAPAN OUTDOOR LEADERS AWARD2017」ファイナリストの10人に全国から選ばれる。

「美しい棚田を将来につなげたい!」「体感を通じて心と体を元気に!」という想いのもと、2007年5月から活動(2010年3月法人格取得)。兵庫県市川町、香美町でお米を育てる体験、温泉など連携した自然を感じる企画などの活動を通じて、生物・食・農の大切さを伝えている。2017年3月「第14回オーライ! ニッポン大賞審査委員長賞」受賞。
URL: <http://tanadalo.com/>

地域からの信頼を得るために

二〇〇七年、大学院で棚田保全や棚田について勉強をしていた私は、ある方の「あと五年で棚田

なくなる参加者がほとんどです。これをきっかけに地域のファンになり私たちが取り組んでいる農作業体験への参加や、地域農産物を購入してくださる方もいます。お会いした方の中で、移住してくださった人たちもいます。現在、その方々は私たちの活動に参加して下さっています。さらに婚活イベント開催をきっかけに、地域全体による移住者を促進していく仕組みづくりが始まりました。こちらは後ほど詳しくご説明したいと思います。



上:「農村deふれ愛ませんか?」でジビエを使ったバーベキューをする
下:さまざまな理由により年々減少している棚田は、環境や生態系を育む宝庫

がなくなくなる」という言葉に衝撃を受けました。棚田は、食の生産地以外にも景観価値・治水機能による地滑り防止作用、生態系保全など多くの価値を有します。このように環境や生態系を育む宝庫でもある棚田は、昔から農家により守られてきました。しかし現在、棚田の多くが作付けされずに、荒廃しつつあり、その数は年々減少しています。日本全国で見ると、棚田は二二万畝あるのですが、そのうちの四〇%が耕作放棄地と言われています。大型の機械を使えないことや、水が入りにくいことから、棚田の耕作は大変重労働であること、過疎化、少子高齢化による地域での作業者が減っていることなど労働力不足・赤字経営が主な理由

として挙げられます。さらには鳥獣被害なども原因の一つとなっています。危機感を覚えた私は「活動をするなら、まず地元を盛り上げていきたい!」との想いもあり、実家から車で一五分程度の上牛尾地域の棚田一枚、約五〇〇平方メートルで、仲間と張り切って稲を育て始めました。しかし収穫直前、イノシシに何と稲を全滅させられてしまったのです。電気柵をすればよいと頭で理解しており、地域住民からもアドバイスを受けていたのですが、まさか全滅するとは思わず、費用と時間が掛かると考え導入しなかったのです。これは悲しかっただけでは済まず、「座学だけか」と住民の信頼を大きく失う出来事となりました。



農作業体験で田植えをする。棚田の保全活動は多岐にわたる。

翌年は無事お米を収穫することができましたが、だからといって住民からの信頼が一〇〇%回復したとは言えません。この経験で私は、「地域の信頼を無くさないように努力しなければ」と強く思いました。

婚活から棚田へアプローチ

さて、二〇二一年、上半尾地域の農村・棚田について考えるため、地元住民に対しアンケートを実施しました。「あなたの所有する農地の跡を継ぐ人はいますか?」の問いに対する結果は、農地の跡継ぎは、住民八八人中、「いる」が四五人で、「いないし探していない」が三四人、「いないが探している」が九人というものでした。

跡継ぎが減るということは棚田の耕作放棄地

が増えるだけでなく、子どもの数も減り小学校も廃校になるなど地域への影響が大きいのです。

このアンケート結果を踏まえ、私たちは地域には結婚適齢期の男性、女性を地域に呼び込む必要があると感じ、地域の信頼を得るために前述の通り棚田の大切さを伝える活動の一つとして婚活イベントの実施を自治会の役員さんに提案しました。

内容は悩んだ末、棚田への関心をもたらし、地区の良さを知ってもらえる内容に、さらにそこに楽しさに加え、婚活から棚田へアプローチする企画にしようと思いました。こうした考えが「農村deふれ愛ませんか?」に反映されています。

イベントのフィールドとして棚田を部外者が来て使うことについて、地元の人たちも賛同してくれました。

実は、棚田が大好きな私は棚田一枚を使って結婚式を挙げています。私と妻は、地域に移住した方が製作してくれたジャケット、ドレスを着て、NPO法人の牧師さんにも来てもらいました。そして、地元の人たちに祝っていただいた人前結婚式になりました。

手前味噌かもしれませんが、この結婚式が「棚田は稲の栽培だけじゃない。面白いことができる」と地域住民の方の意識を変えるきっかけになったのではないかと思っています。

地域全体で移住促進活動

今、考えていることは移り住んでくれる人を増やす仕組みづくりです。

「農村deふれ愛ませんか?」の実施を通して地

元の人たちの信頼を得られつつある私たちは、移住を促進するために、居住支援協議会を地元の人たちとともに立ち上げることができました。今までに約一四人の移住者を募ることができています。

さらに、うれしいことに役場の方々も積極的に移住促進とオーガニックの促進に取り組みられるようになり、座学や実技の体験の場の提供などを行うと同時に、既に移住した方や農業者への支援が行われています。今後いかに移住者が生計を立てていく仕組みをつくっていくかなど大きな課題がありますが、居住支援協議会とも連携してより良い方法を考えていきます。

「農村deふれ愛ませんか?」は今年も九月一八日(月・祝日)、二月二六日(日)に開催予定です。イベントの内容をより充実させ、結婚して移住してくださる方が増えるように尽力していきます。

私たちは今後も、棚田の大切さを広く伝える活動を続けることで、日本の農業を育み盛り上げていきます。将来的には棚田サミットを兵庫県で開催することも夢に描いています。

当初は、日本にとつても大切な棚田がなくなるという危機感から棚田を保全しようと作付けから始めた学生の活動が、今、地域の人たちや活動に賛同してくれる仲間たちとともに、さまざまな活動に発展したことに感動を覚えます。棚田や農村に興味を覚えた方はぜひ一度、私たちの活動フィールドへ訪れていただきたいと思います。そして、私たちの活動に共感をしていただけたならば、ぜひ一緒に楽しく活動し、棚田や農村から日本の農業を育み盛り上げていきましょう!

『コーヒーの科学』

『おいしさ』はどこで生まれるのか』

日部 幸博 著



(講談社・1,080円 税抜)

コーヒー好きの「なぜ？」に答える

青木 宏高

(NPO法人「良い食材を伝える会」理事)
そこは、東京・新宿の繁華街から逸れた路地を曲がった奥まった一角にある喫茶店。決まって月一度、会って打ち合わせをする。相手は、世界中を飛び回るカメラマンで、写真集『地球生活記』(福音館書店)は取材三〇年、一七〇〇余点の写真を収録した今世紀最高の一冊と称された。

彼はそこで、いつも不思議なコーヒーを飲む。手のひらに収まる小さなカップにドロリとした液体のトルココーヒー。次はモカである。アラビア半島イエメンのコーヒーである。内乱状態に入国の難しい国だが、彼は、この国の庶民の暮らしを何回も撮り続けていた。この日も砂糖なしではとても口に入らないコーヒーをスーと流し込む。一九七〇年代、痛烈なコーヒーの思い出である。

やがて、歌謡曲「コーヒールンバ」が大ヒット。喫茶店ブームが起こり、コーヒー文化は日本人の生

活の中にオシャレな雰囲気を含みながら定着していった。家庭で豆を挽き、サイフォンで淹れるコーヒー生活。そして、黎明期はやがて今日のコンビニに象徴される「まちカフェ」へ、日本のコーヒー文化は変化していく。

この本を書いた日部幸博さんは医学博士で、本職は基礎医学。バイオ系の研究者で、普段は大学で遺伝子研究や微生物学を講義する。学者の日部さんのコーヒー本出版の経緯が変わり種。自身の記述によれば、大学一年の頃、たまたまコーヒーが好きになって、インターネットのウェブサイトに「百珈苑」をみずから開設。「おいしさはどこで生まれるのか」を探求した結果が、一冊の本になった。

目次には「コーヒーってなんだろう?」「コーヒノキとコーヒ豆」「コーヒの歴史」「コーヒのおいしさ」「おいしさを生み出すコーヒの成分」「焙煎の科学」「コーヒの抽出」「コーヒと健康」が並び、どの項目も科学者らしい探究で、有無を言わせない。

個人的印象で確かな数字を持ち合わせないが、コーヒはおいしいと思う人の数だけ、おいしくないと言う人がいる気がする。日部さんはそこに、化学分析をおこない、科学的に説明し、結論を得て、コーヒのおいしさとは、香ばしさと苦みを中心に、酸味その他のさまざまな要素が混然一体となって生まれる複雑さこそがおいしさという。

最後に、かの文豪バルザックは原稿に追われ、一日五〇杯飲んだと伝えている。

読まれています 三省堂書店農林水産省売店 (2017年6月1日~6月30日・税抜)

タイトル	著者	出版社	定価
1 ルポ 農業新時代	読売新聞経済部/著	中央公論新社	860円
2 稼げる農業 AIと人材がここまで変える	日経ビジネス/編	日経BP社	1,200円
3 ITと熟練農家の技で稼ぐ AI農業	神成 淳司/著	日経BP社	1,800円
4 逐条解説 農業協同組合法	農業協同組合法令研究会/編著	大成出版社	14,000円
5 るるぶ 東京の農業林業水産業	JTBパブリッシング/編	JTBパブリッシング	860円
6 2025年 日本の農業ビジネス	21世紀政策研究所/編	講談社	800円
7 アグリビジネス進化論 新たな農業経営を拓いた7人のプロフェッショナル	有限責任監査法人トーマツ・農林水産業ビジネス推進室/著	プレジデント社	1,500円
8 新版 キーワードで読みとく 現代農業と食料・環境	「農業と経済」編集委員会/監修、小池 恒男、新山 陽子、秋津 元輝/編	昭和堂	2,400円
9 農業と農政の視野/完 論理の力と歴史の重み	生源寺 眞一/著	農林統計出版	1,800円
10 環境制御のための植物生理 オランダ最新研究	エペ・ファーヴェリンク、タイス・キールケルス/著、中野明正、池田 英男 他/監訳	農山漁村文化協会	4,900円

農業競争力強化支援資金のご案内

農業および農業生産関連事業の健全な発展を目指して

良質かつ低廉な農業資材の供給、および、農産物流通などの合理化の実現を図るため、農業生産に関連する事業の再編を促進することを目的とした資金制度です。

■ 農業競争力強化支援資金の概要

ご利用いただける方	<p>「農業競争力強化支援法」に規定する認定事業再編計画に基づいて事業再編を実施する次に掲げる方(中小企業者^(注)に限ります。)</p> <p>①飲料食品(花きを含む。以下同じ。)の卸売事業者(米穀卸売事業者、生鮮食料品卸売事業者など)</p> <p>②飲食料品の小売事業者</p> <p>③飲食料品の製造事業者(小麦粉製造事業者、牛乳・乳製品製造事業者など)</p> <p>④配合飼料製造事業者</p>
対象となる事業	<p>「農業競争力強化支援法」の規定により農林水産大臣等の認定を受けた事業再編計画に基づいて行う事業再編の実施に必要な事業であって次に掲げるもの</p> <p>①卸売、小売、製造もしくは加工のための施設の改良、造成もしくは取得</p> <p>②①の事業に伴う特許権の取得 など</p> <p>③他の事業者の株式もしくは持分の取得または他の事業者との資本提携による支配関係の構築のための出資</p>
融資条件	<p>利率</p> <p>0.18~0.45% (2017年7月20日現在)</p> <p>※利率は融資期間によって異なります。</p>
	<p>融資期間</p> <p>10年超20年以内(うち据置期間3年以内)</p>
	<p>融資限度額</p> <p>負担額の80%以内</p>
	<p>担保・保証人</p> <p>ご相談の上、決めさせていただきます。</p>

(注) 中小企業者とは、右表の条件を満たす会社および個人です。なお、協同組合などは、右表の規模を上回る場合でも中小企業者に該当します。

ただし、農事組合法人、社団法人・財団法人(一般・公益含む)、有限責任事業組合(LLP)の方は規模にかかわらず中小企業者に該当しません。

	基準	
主たる業種	資本金(会社のみ)	従業員
製造業、その他	3億円以下	または 300人以下
卸売業	1億円以下	または 100人以下
サービス業	5,000万円以下	または 100人以下
小売業	5,000万円以下	または 50人以下

※ご融資に当たっては審査があり、ご希望に沿えない場合がございます。

第六八回アプラカ理事会に参加

六月五〜八日の四日間、中国の北京にて第六八回アジア太平洋農村・農業金融協会（APRACA）※の

理事会および地域政策フォーラムが開催され、日本公庫農林水産事業本部特別参与の豊田浩司、情報企画部の五十嵐拓が出席しました。

今回の理事会では、二〇一三〜一八年の活動計画に基づく実施報告が行われました。さらに、APRACAメンバー拡大の方向性が確認され、中国、インド、フィリピン、シンガポールと新たな四つの機関の加入報告などが行われました。地域政策フォーラムでは、発展途

上国での貧困削減における農村・農業金融の役割について、中国および

イランによるプレゼンテーションが行われました。また、優良事例について、中国およびタイより発表がありました。

次回、インドで開催される第六九回APRACA理事会では、APRACAの四〇周年を記念したセミナーの開催が予定されています。

（情報企画部）

※アジア太平洋地域の農村・農業金融制度の改善を図るため、情報交換や研究・教育などの交流事業を行う機関です。日本では日本公庫が唯一の加盟機関となっています。



上：アプラカ理事会の様子
下：アジアの金融機関から多数の関係者が出席

農業経営アドバイザーの活動を推進

「農業経営アドバイザー活動推進協議会」の二〇一七年度総会を開催し、参加団体などから約三〇人が出席しました。本協議会は農業者の経営改善を支援する農業経営

アドバイザーの活動を促進する仕組みづくりとして、日本公庫が事務局となり昨年六月に設立。農業経営アドバイザーの輩出団体やユーザー団体など農業経営アドバイザー制度に関わる全国段階の關係団体を網羅する組織です。

総会では、来賓の農林水産省経営局金融調整課長の山口靖氏から「農業の成長産業化のためには農家の積極的な活動をさらに推進する必要があり、さまざまな面で農家に寄り添ったサポートが重要になる。効果的に経営支援をする体制づくりを考えていかなければいけない」とのお話がありました。

続いて、農業経営アドバイザーの連絡先、専門分野、初期相談費用などの情報を共有するアドバイザーの見える化を行ったことや、アドバイザーを構成員とする「農業経営アドバイザー連絡協議会」を四六都道府県に設置し、各都道府県や農

業団体と協力関係の構築を図ったことなど、一六年度の取り組み状況を事務局より報告しました。

意見交換では、「農業者にアドバイザーの必要性を認識し活用してもらうことで、農業者の成長とアドバイザーのスキルアップが図られ、双方が利益を得られる関係を築くことが大切」「アドバイザーの専門性を高め、高度な課題に対応できるエリートアドバイザーの創設が必要」など多くの意見・要望が挙げられました。これらの意見を活かしてさらに活動を推進してまいります。六月一六日、於：東京都千代田区公庫本店（情報企画部）



今後の取り組みについて意見を交換し合う参加者たち

みんなの広場

平成29年7月の九州北部の大雨により被害を受けた皆さまに対しまして、心よりお見舞い申し上げます。

日本公庫では、農林漁業者などの皆さまに対して、本店および福岡支店、佐賀支店、熊本支店、大分支店の各農林水産事業に相談窓口を設置し、ご相談を受け付けています。ご融資やご返済に関するご相談に、政策金融機関として迅速、かつ、きめ細かな対応を行ってまいります。

■お問い合わせ先

本店 TEL:0120-926478
 福岡支店 TEL:092-451-1780
 佐賀支店 TEL:0952-27-4120
 熊本支店 TEL:096-353-3104
 大分支店 TEL:097-532-8491
 の各農林水産事業

『AFCフォーラム』はいつも興味を持って読んでいます。特に記憶に残っているのは、今年二月号の林業特集です。

私は中山間地域で農業を営み、わずかながら山林も所有しています。私の父たちが、将来の退職金代わりにと山に杉を植えました。

しかし、ご存じの通り一九六四年の木材の輸入全面自由化以降、急激に外材の供給量が増加し、国産材の価格は下落の一途をたどりました。

その結果、手入れされることになくなった山は荒れ、地滑りなどの自然災害のリスクは増すばかりです。

経済だけでは測れない森林を守ろうと、二月号に掲載された林業家の皆さんの懸命な山林経営姿勢に

感銘を受けるとともに、防災のためにも森林管理予算の必要性を感じました。
 (広島県庄原市 藤本勲)

みんなの広場へのご意見募集

本誌への感想や農林漁業の発展に向けたご意見などを同封の読者アンケートにてお寄せください。「みんなの広場」に掲載します。二〇〇字程度ですが、誌面の都合上、編集させていただきます。住所、氏名、年齢、職業、電話番号を明記してください。掲載者には薄謝を進呈いたします。

【郵送およびFAX先】

〒100-0004
 東京都千代田区大手町一―九―四
 大手町フィナンシャルシティノースタワー
 日本政策金融公庫
 農林水産事業本部
 AFCフォーラム編集部
 FAX 〇三―三三―七〇一―三五〇

編集後記

④ 農業競争力強化支援法が始動。関連業界や政策の動向に注目し、ご自身の経営を有利に進めてください。政策は支援、主人公は農業者です。

さて、稲作経営者の皆さまから、飼料米作付け増で米需給が引き締まり米価が上昇、業務用などで安価な輸入米に切り替わらないか懸念する声を聞きました。国産米が消費者に届かぬ矛盾は避けたいもの。(嶋貫)

④ 「認知症」は病気と分かっているも、家族にとってもつらいものですね。「フォーラムエッセイ」の大久保さまもそのお一人。あんなにお料理好きだったお母さまの「作るのは好きではないわ」のひと言は大久保さまの心に悲しく響いたことでしょう。大久保さまが作るミートローフやお漬物をお母さまが召し上がったら何とおっしゃるのでしょうか。(小形)

④ 「生産資材価格の引下げ」は農薬や肥料など生産資材の価格が安くなることを狙い流通の合理化を促すというのですが、現場からは「自分の経営に適した資材を選べる」ことが重要とする声なども聞かれました。政策は、主役である農業者一人ひとりの現場事情に沿って誰からも喜ばれるものであってほしいです。(城間)

④ オーディオとコーヒーが趣味の父の隣で、ジャズやクラシックをバックにコーヒー豆を挽く音と香ばしい香りを楽しむのが好きでした。今でもコーヒーは大好きでコーヒー関連の本も読みますが、「おいしさの感じ方」までもが数値で分析された「コーヒーの科学」という一冊に興味を湧きました。読者の皆さま、おいしいコーヒーをどうぞ。(上原)

AFCフォーラム Forum

■編集

嶋谷 元 嶋貫 伸二 清村 真仁
 柴崎 勇太 小形 正枝 城間 綾子
 上原 理恵子

■編集協力

青木 宏高 牧野 義司

■発行

(株)日本政策金融公庫 農林水産事業本部
 Tel. 03(3270)2268
 Fax. 03(3270)2350
 E-mail anjoho@jfc.go.jp
 ホームページ https://www.jfc.go.jp/

■印刷 凸版印刷株式会社

■販売

株式会社日本食糧新聞社
 〒105-0003 東京都港区西新橋2-21-2
 第一南桜ビル
 Tel. 03(3432)2927
 Fax. 03(3578)9432
 ホームページ
 http://info.nissyoku.co.jp/koudoku/
 お問い合わせフォーム
 http://info.nissyoku.co.jp/modules/form_mail/

■定価 514円(税込)

④ ご意見、ご提案をお待ちしております。

④ 巻末の児童画は全国土地改良事業団体連合会主催の「ふるさとの田んぼと水」子ども絵画展の入賞作品です。

国産にこだわり農と食をつなぎます。

第12回 アグリフードEXPO 東京 2017

—— プロ農業者たちの国産農産物・展示商談会 ——

日時

8月23^水日/24^木日
10:00~17:00 10:00~16:00

主催



日本政策金融公庫

会場

東京ビッグサイト 東6ホール



始動！農業強化の支援法



『おじいちゃんと農作業～楽しかった収穫～』西山 青磨 兵庫県南あわじ市立賀集小学校

■AFCフォーラム 平成29年8月1日発行(毎月1回1日発行)第65巻5号(804号)
■発行／(株)日本政策金融公庫 農林水産事業本部 〒100-0004 東京都千代田区大手町1-9-4 Tel.03(3270)2268
■販売／株式会社日本食糧新聞社 〒105-0003 東京都港区西新橋2-1-2 第一南楼7F Tel.03(3432)2927 ■定価514円 本体価格476円

